

播磨国賀毛郡の地名伝承

今津 勝紀

『播磨国風土記』にみえる賀毛郡の地名伝承は、次のようにあります。

賀毛と号するゆえは、品太天皇の世、鴨村に双鴨が栖を作り卵を生めり。故に賀毛郡と曰う。上鴨里、土は中上。下鴨里、土は中中。右二里、鴨里と号するゆえは、已に上に詳なり。但し、後に分ちて二里となす。故に上鴨・下鴨と曰う。品太天皇の巡行之時、此の鴨飛発し、修布井樹に居めり。此の時、天皇、問いて云く、『何の鳥か』、侍従當麻の品遅部君前玉、答て曰く『川に住める鴨なり』、勅して射さしめる時、一矢二鳥にあたる。即ち矢を負いて山より岑を飛越し処は、鴨坂と号す。落ち倒れし処は、仍ち鴨谷と号す。羹を煮し処は、煮坂と号す。

『風土記』は和銅六年（七一三）に、政府が全国に命じて編纂された地誌で、国ごとに古老の言い伝えなどをもとに作成されました。ここに鴨坂・鴨谷・煮坂（にさか）などの地名がみえます。それぞれの地名の現地比定は慎重に扱わねばならないのですが、この風土記の伝承によると、元来ひとつであった鴨村を「品太天皇」すなわち応神天皇が巡行するに際して、一つの矢で二羽の鴨を射たことにより、上鴨・下鴨の分割がなされたことが説明されています。上鴨・下鴨の分割が応神天皇の頃であったか

どうかは、問題にならないことで、不明とせざるをえないのですが、ここで取り上げたいのは、鴨里が説明される部分にみえる伝承そのものです。この地名起源伝承は、敢えて言うならば、応神天皇と品遅部君前玉の鳥追い伝承と言ってもいいでしょう。当麻の品遅部（＝品治部）君前玉とはヤマトの北部葛城地域にあたる当麻の豪族と考えられます。

実は、古事記・日本書紀には、鳥追いに關するまとまった伝承が残されています。それは、垂仁天皇の皇子ホムツワケの伝承です。古事記にみえるホムツワケの伝承は、垂仁天皇と佐保比売との間に生まれたホムツワケが、火中に出生したことになむ命名譚と、ホムツワケが長じても話をしなかったという物言わぬ皇子の言語回復譚により構成されます。古事記により大まかな筋を述べると、垂仁天皇の皇子であるホムツワケは、サホヒコの滅亡の際、燃えさかる稻城の中から救出され、それにちなんでホムツワケと命名されたのですが、彼は、長じても話をすることがなかった。そんな彼が、高く飛び行く鶺鴒の音を聞いて初めて言葉を発した。そこで古事記では、山辺大擢を派遣して、鳥を追わせる。山辺大擢は、紀国（紀伊）・針間（播磨）・稻羽（因幡）・旦波（丹波）・多遅麻（但馬）・近淡海（近江）・三野（美濃）・尾張・科野（信濃）・高志（越）へと追いかけて、ついに和那美の水門で鳥を捕まえる。しかしこれでも物を言わぬ皇子に対して、ホムツワケが出雲大神を奉ることをついに言語を回復する。彼が行く先々にホムツワケにちなみ、鳥取部・鳥甘部・品治部・大湯坐・若湯坐を設置し

た、とのことです。

この古事記ホムツワケの伝承をめぐっては、国文学でも研究が積み重ねられており、すでに火中出生と命名に関する部分については、これが漢訳仏典の『経律異相』「瞻婆女人見死闇維於火中生子」による潤色であることが明らかにされています。また、物言わぬ皇子の部分についても『経律異相』「慕魄不言被埋後言得修道」に類似する部分がありますが、ここは多少異なる部分もあります。つまり、ホムツワケの伝承は、古事記を編纂するに際して『経律異相』を下敷きにしたことが明らかであり、この部分は、古事記編者の創作である可能性が考えられます。このように現在の古事記のホムツワケの物語には編者による創作の可能性が考えられる部分が含まれるのですが、鳥追いの部分に関しては、現状ではそのようなものが見つかっていません。恐らく、この部分は古くから神話の核として存在していたのではないのでしょうか。

そこで、記紀のホムツワケの鳥追い伝承ですが、事実関係は別として、古事記では山辺大擢が鵠を追って、播磨に至っていること、また品治部の設置がそれに関連して見えることに注目したいと思います。播磨国風土記の賀茂地名伝承と密接に関連することは明克かです。播磨国風土記が古事記など朝廷の伝承を参照した可能性も否定しきれませんが、風土記の地名起源では応神天皇の頃の話とされており、古事記を下敷きにしたものとは考えられません。恐らく、播磨にも何らかの鳥追伝承が残されており、それが風土記に採録されたものと考えるのが合理的でしょう。すなわち鳥追の伝承が、

宮廷だけではなく播磨にも存在していたのです。

『古事記』は宮廷に伝わった帝紀・旧辞をまとめたものですが、帝紀とは皇統すなわち王の系譜であり、旧辞とは神話や伝承のことです。いまここで詳しく述べる余裕はありませんが、系譜と神話は、古代の社会を組織立ててゆく上で、大変重要な意味を持っていました。賀毛郡の地名起源伝承は古事記に残された伝承（旧辞）の別伝としての価値をもつものであり、この地域の歴史を復原する上で重要な鍵になると言えます。

（『加西市史編集室だより』2、2001.8）